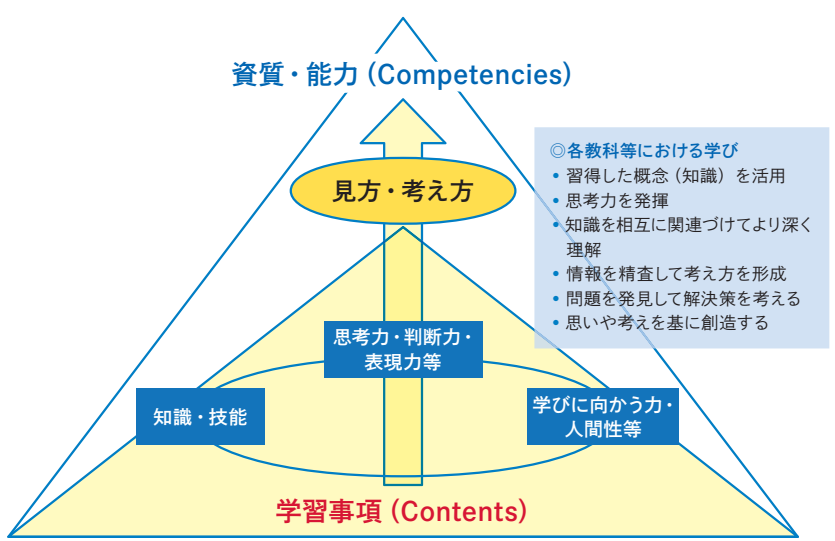
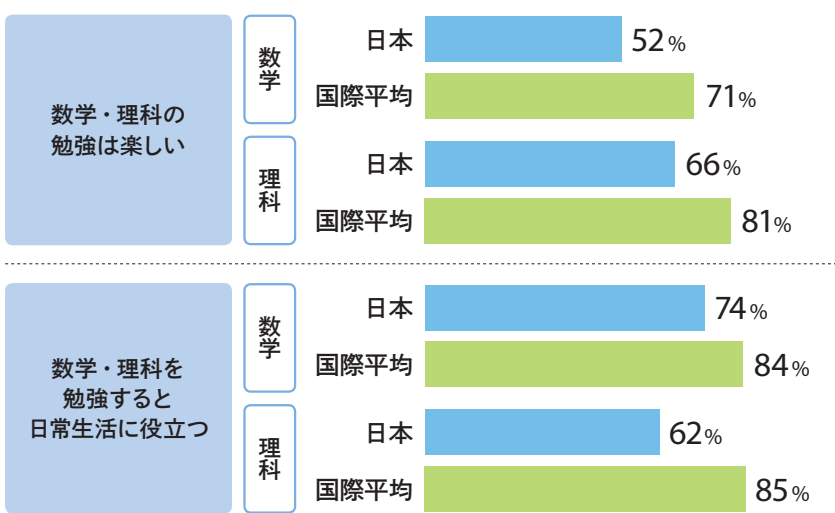


図1 「見方・考え方」の役割 (イメージ)



* 「地方創生イノベーションスクール 2030 第2期 (ISN2.0) キックオフシンポジウム」配布資料を基に編集部で作成

図2 数学・理科の学習に対する生徒の意識



注) 生徒質問紙調査 (対象: 中学校2年生、参加40か国・地域、約25万人) において、上記項目に「強く思う」「そう思う」と回答した生徒の割合の合計。
* 「IEA国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS2015) 質問紙調査結果」を基に編集部で作成

そして、この3つの柱を育成するために次期学習指導要領に明記されたのが、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」です。しかしながら、そこに規定されている「主体的」「対話的」に比べて、「深い学び」はイメージしにくいとよく伺います。「深い学び」は、「習得・活用・探究」の学びの過程の中で、

各教科の特性に応じた「見方・考え方」を働かせることによって、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して自分なりの考えを持ちたりする学びの事です。一例を示しましょう。中学校の社会(地理的分野)の「見方・考え方」のイメージは、「社会的現象を、位置や空間的な広がりに着目して捉

え、地域の環境条件や地域間の結びつきなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連づけること」とあります。例えば、みかんの生産量が多いのは和歌山県、愛媛県、静岡県となりますが、それを知識として覚えるだけでなく、みかんの名産地に共通する地理的条件を見いだすことで、空間的な広がりを意識でき

ます。それが、みかんを栽培しやすい地域はどこか、地域の人々の暮らしや産業にどのように関係しているのかなど、地理的特徴と人間の営みの関係をより理解する能力を身につけることにつながります。つまり、「コンテンツ」と「コンピテンシー」を結びつけた指導が求められているのです(図1)。

学ぶ意義を考える上でも、「見方・考え方」が大切になります。生徒はしばしば、「これを学んで何になるのか」といった疑問を口にします。実際、IEAのTIMSS(国際数学・理科教育動向調査)2015の結果(図2)からは、「なぜ学ぶのか」「学ぶことに意味はあるのか」といった疑問を持つ子どもの姿が浮かんできます。勉強が楽しいと感じられない、役立つと思っていないのは、大きな問題です。

教科の本質である「見方・考え方」に光をあてることは、「なぜこの教科を学ぶのか」を考え直すきっかけにもなります。生徒に学ぶ意味を伝えたい上で、「コンテンツ」と「コンピテンシー」をつないだ授業を各教科で組み立てていくことが、次期学習指導要領では求められます。